JMSCA 登山月報 第606号 令和元年９月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）

登山月報

ジャヌー（クンバカルナ、7,710 m）

「ジュニア登山教室 in 立山」報告 …… 2
ＩＦＳＣパラクライミング世界選手権2019 フランス・ブリアンソン大会 … 3
第130回 Mountain World …… 5
新連載『日山協と私』 …… 6
International Summer Climbers Meet 2019報告 …… 9
令和元年度前期 海外登山奨励金 選考結果 …… 10
山の日・ＹＡＭＡＮＡＳＨＩ 第４回「山の日」記念全国大会2019 … 11
ＪＭＳＣＡ／ＦＦＭＥの覚書締結…… 12
２０１９年度「上月スポーツ選手支援事業」認定式 …… 12
ネパール航空が就航…… 12
安全登山サテライトセミナー（福岡）…… 13
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば、編集後記 …… 14

No.606

「ジュニア登山教室 in 立山」報告

８月25（日）～28日（水）の３泊４日の日程で行われた「ジュニア登山教室ｉｎ立山」は今回で10回目を迎えた。

今回は小学生11名、中学生１名、日山協スタッフ５名、富山からのスタッフ４名に加えて補助スタッフとして神奈川県の藤沢翔陵高校の３年生山岳部員３名、計23名が参加した。

25日、新宿モード学園ビル前を７：30にバスは出発。14：30に国立立山少年自然の家に到着し、開講式とオリエンテーション。その後15：00過ぎから自然の家近くの来拝山（899. 9ｍ）に足慣らしを兼ねて２時間ほどかけて登った。足慣らしとはいっても結構な急登、滑りやすい箇所もあり本番の立山より厳しい登山だったかもしれない。しかし子どもたちはみんな元気で、１時間ほどで着いた山頂ではクワガタムシやバッタを捕まえていた。山頂からは雲の切れ間に立山連峰が見えていた。

26日、朝の集いに参加。朝食後、バスで立山カルデラ砂防博物館に移動。ここで館長の飯田先生から立山についてのお話を聞く。立山は「上昇する・氷の・水の・熱の」という４つの要素を持った山ということを学習した。３Ｄ映画を見て、学芸員の方に立山に生息する生き物に関するお話を聞いた後、展示室を見学した。充実した時間であった。昆虫に詳しい小学校２年生の子が学芸員の方に熱心に質問をしていたのが印象に残った。

午前中いっぱいを博物館で過ごした後は国立登山研修所に行き、食堂で「ピステ」のマスターが作ってくれたおいしいカレーライスを食べた。13：00より研修所の体育館でスポーツクライミング体験。クライミングジム「ゲッコー」のスタッフの指導で約２時間、５つの壁をトップロープでかわるがわる登った。その後

雄山山頂

国立立山青少年の家

自然の家に戻り「家へのたより」を書いた。みんなしっかりした字で書けていた。字だけでなくクワガタの絵を描いている子もいた。この手紙は富山岳連の佐伯さんが室堂の郵便局でスタンプを押して送ってくださった。いい立山土産になるだろう。この日は一日中すっきりとした抜けるような青空であった。晩のフリーセッションで翌日の登山の持ち物などを確認して21：30に就寝。

27日、高曇りではあるが夕方までは天気は持ちそうだ。今日は雄山コースと浄土山コースの２つに分かれて登山をする。６：30の朝食後、ます寿司の入った弁当を持ち早々にバスに乗り込む。立山黒部アルペンルートで室堂に上がっていく。車窓から美女平の巨大な立山杉を眺め、弥陀ヶ原の七曲がりを経て室堂に到着。支度をして全体写真を撮り９：23に出発。雄山コースは小中学生８名、高校生３名、原さん、谷口に加えて、富山岳連の黒崎さんと登山研修所元所長の宮﨑さんが同行してくださった。浄土山コースは小学生４名に滝内さん、宇津さん、富山からは菅田さんが一緒に歩いてくださる。

雄山コースは一ノ越まで約１時間、そこから休憩を

室堂にて

入れて１時間20分ほどの11：53に雄山山頂に到着。そこでランチタイム。後立山の山々や槍ヶ岳が見えた。眼下にはミクリガ池の絶景。中高生の４名はそこから大汝山まで足を伸ばした。大汝山からは黒四ダムも見下ろせた。記念写真を撮って引き返し、一ノ越で先に下山していた小学生チームに追いつき14：40室堂に戻った。

浄土山コースも同じ時間に室堂を出発。岩だらけの急登を、息を切らしながら登り、11：40に浄土山南峰山頂に到着した。ここは立山三山の一つ。後ろに雄山を、眼下に立山カルデラを望みながら昼食を摂った。記念写真を撮り12：20に出発。一ノ越を経由し室堂に向かう途中13：40に雷鳥の子供八羽と出会う。その後山容が綺麗に川面に映し出されるミドリガ池、ミクリガ池を通り無事室堂に到着。14：50。

15：10バスに乗車しアルペンルートを下る。真砂岳や別山、剱御前の奥に剱岳の雄姿が見えた。高校生たちが「登りたいなぁ。」と口々に。是非登ってもらいたいものだ。「あれが鍬崎山、あれが薬師岳。」菅田さんの説明を受け地図を開く。バスは弥陀ヶ原を下っていく。美女平を過ぎたあたりから時折小雨がぱらつきだした。16：40少年自然の家に到着。入浴、夕食後19：30からプレイルームでお楽しみ会。３つの班にそれぞれ高校生が１名ずつ加わって、伝言ゲーム・風船蹴まり・ペットボトルボーリングでチームワークを競い楽しんだ。どれも工夫されていておもしろかった。体と五感を使って遊ぶのが一番。その後、本日の登山の振り返りをして就寝。

28日最終日。朝食後全体の振り返りと閉講式を行った。「今はこうして自然の家に泊まって、ごはんを作ってもらって山に登ったが、高校生になったらテント担いで、当然自炊でたくさんの山に登ってもらいたい。いっぱい経験を積んで、今回ベースでサポートをしてくださった佐伯さんのようにヒマラヤの8000ｍ峰にも行けたらいいね。それとここへ来させてくれた家族に感謝ですね。」こんな挨拶をした。

少年自然の家を後にして、外はにわか雨になっていたが、最後の見学地称名滝に行った。雨も降っていたが、いやいや滝はものすごい水量で展望台へ渡る橋でしぶきを浴び全身びしょびしょに。上では結構雨が降ったのかもしれない。とにかく大迫力だった。みんなびしょびしょでバスに戻り着替えをしてから立山駅に向かった。ここで石川県から参加の女の子とお別れをして、バスは一路東京へ。ちょうど19：00に新宿着。家族の出迎えを受け、無事に2019年度の「ジュニア登山教室 in 立山」は終了した。

10回目は一つの節目。この登山教室に限らず、各岳連で実施している「少年少女登山教室」もこれからどのような形で運営していくか。それから子どもたちが山と出会い、山の楽しさを知り、将来自立した登山者になるには何をしたらよいのか。登山普及委員会の今後の課題としたい。　（記　谷口浩平）

IFSCパラクライミング世界選手権2019 フランス・ブリアンソン大会

６回目を迎えたパラクライミング世界選手権大会は、当初東京都八王子市で行われるクライミング世界選手権大会と同時開催の予定であった。しかし、３月末のＩＦＳＣ総会で諸般の理由により分離開催となった。そのため世界中のパラクライマーからは落胆の声が上がった。参加者数がどれだけになるか気になったが、ふたを開けてみると200名を超える過去最多のパラクライマーがフランスのブリアンソンに集まった。

日本パラクライミング協会も地元開催を想定し代表メンバーを選定していた。視覚障害部門Ｂ１男子１名、Ｂ２男子２名、Ｂ２女子２名、Ｂ３男子３名、欠損部門ＡＬ１男子２名、ＡＬ２男子２名、ＡＵ１男子１名、神経障害部門ＲＰ３男子１名、ＲＰ３女子２名、計16名の過去最多の選手を急遽フランス・ブリアンソンに派遣した。

大会は７月16日、17日の２日間というタイトなスケジュールで進められた。

１日目はＢ２男子、Ｂ３男子、ＡＬ２男子、ＡＵ１男子、ＲＰ３男子女子の予選２本と決勝が行われた。

午前午後に行われた予選２本の成績で、Ｂ２男子の會田祥選手が予選１位、濱ノ上文哉選手が予選４位。初出場のＢ３男子江尻元洋選手が予選４位に食い込み決勝進出を果たした。

ＲＰ３女子の吉田藍香選手は予選１位、吉田桃子選手が予選２位で計５名の選手がそれぞれ決勝へ進んだ。Ｂ３男子蓑和田一洋選手、同星野隼人選手、ＡＵ１男子の大沼和彦選手とＲＰ３男子高野正選手は惜しくも決勝進出を逃す。また、ＡＬ２男子の結城周平選手と平野草原選手は初参加。結城選手は健闘しあともう少しのところで決勝進出を逃す。ＡＬ２クラスは海外選手のレベルが大変高く、入賞するには相当のレベルアップが必要であると感じた。

20時から始まった決勝は、Ｂ２男子會田選手がＴＯ

Ｐの一手下でタイム切れとなるものの、２位以下の選手の高度をはるかに上回り優勝。會田選手は通算４回目の優勝を果たした。

Ｂ３男子の江尻選手は、予選４位から逆転で３位に食い込みメダルを獲得。ナビゲーターの宮本容幸コーチと熱い握手を交わした。

ＲＰ３女子の吉田藍香選手は安定した登りでＴＯＰ下まで迫り前回大会に引き続き優勝を果たした。同吉田桃子選手は前回に引き続き吉田藍香選手の到達高度には及ばず２位となった。

決勝が終わり、メダルセレモニーが行われ、日本チームは金２、銀１、銅１のメダルを獲得。１日目で昨年のメダルと同数を獲得することが出来た。

大会２日目、４連覇のかかるＢ１男子小林幸一郎選手が出場した。その他にもＢ２女子、ＡＬ１男子の各試合が行われた。

Ｂ１男子小林選手は風邪気味で体調不良であったが予選１本目を余裕のＴＯＰ、２本目も最高到達点を記録し貫禄の予選１位通過を果たした。

Ｂ２女子は江尻弓選手が予選２位、青木宏美選手が予選４位。青木選手は念願の決勝進出を果たす。

ＡＬ１の大内秀之選手はカテゴリーが成立しているがＲＰ１とマージされ不利な状況で戦った。総合成績で13位となり決勝進出は果たせなかったが、ＡＬ１では２位に食い込み銀メダルを獲得した。

午後８時から行われた決勝では、Ｂ２女子江尻選手は中間部の急傾斜部分を粘り２位の高度を確保し、前回大会４位の悔しさを晴らした。青木選手は急傾斜で力を使い果たし惜しくも予選と同じ４位でメダルを逃した。

Ｂ１男子の小林選手は、決勝に進んだスペイン・ロシアの選手の追い上げが気になったが、ナビゲーターの鈴木直也コーチとの息の合ったコンビで最高高度に

B2男子會田選手表彰式

達し、４連覇を達成した。

メダルセレモニーでは昨日に引き続いて日の丸が中央に上がり、君が代が会場に響き渡った。

今回、金３、銀３、銅１と計７個のメダルを獲得することが出来た。クライマーだけでなくパラクライマーも日本のレベルの高さを世界に証明することが出来た。しかし、世界のレベルも確実に上がってきている。また、若い選手も大勢出場し、世代交代も起きている。日本チームも今回の成績に満足することなく選手を発掘しレベルアップを目指していかなければならない。またパラリンピックでのクライミング競技の導入時に慌てることなく世界レベルの選手を育成していかなくてはならないと思う。

最後に、選手登録・大会登録にご協力していただいたＪＭＳＣＡ事務局様、支援を申し出てくださった全国の多くの方々に感謝いたします。ありがとうございました。

（日本パラクライミング協会会長　佐藤　建）

B1男子小林選手

RP3女子表彰式

第130回 Mountain World

リンク・サール7041 m　ついに初登頂

池田常道

中部カラコルム、マッシャブルムやチョゴリザの南にフーシェ谷とコンダス谷を分かつ山稜がある。Ｋ７、Ｋ６など峻険なピークを連ね、その間にある7041 m峰がリンク・サールと呼ばれている。リンク（Link）はドイツ語で「左」を意味するが、これは、1970年に南側のナンマー谷からＫ６（7281 m）に初登頂したオーストリア隊（ＯＡＶ学士山岳会ウィーン支部）のエドゥアルト・コプルミューラー隊長が命名したものだ。ただし彼らは、南からＫ６を見たときＫ６西峰（7040 m）を「Link Sar 左の峰」と呼んだだけで、現在のリンク・サールは当時、ノクソンのスケッチマップでは無名峰7040 mでしかなかった。

こちらは1964年ドイツ隊（ＤＡＶベルリン支部）がウルリヒ・ロロフ隊長の下に試登したが、彼らはＫ６を目ざしてこの山の6300 m付近まで達して敗退した。標高の似ているこの両峰は混同されて、その後の文献やネット情報では、Ｋ７とＫ６を結ぶ（Link）位置にある山だからと誤った解釈も流布されてきた。Ｋ６西峰をリンク・サールと呼ぶ例は消え、無名だった7041 m峰にその名が充てられるようになって久しい。

カラコルムで未踏の7000 m峰と言えば、その後の登山隊が注目して当然だった。64年ドイツ隊から15年ぶりに7041 m峰（現在のリンク・サール）に挑戦したのは、79年の立正大学隊で、後藤喜久夫隊長ら７人がコンダス側から東壁（現在の南東壁）に取付いて6050 mまで達した。Ｋ７（6934 m）には76年福岡ＧＣＣ同人隊（成末洋介隊長）がカベリ氷河から北面、77年亜細亜大学隊（石川佑隊長）がチャラクサ氷河から南面を試みたがいずれも敗退、84年に東京大学隊（永田東一郎隊長）が南西稜から初登頂した。

のちにアメリカ山岳会会長となるスティーブ・スウェンソンは、ジョージ・ロウら５人を誘って、2001年に東壁を試みたが敗退。その後何度も申請を繰り返したが、印パ暫定国境に近いコンダス側は開放されなかった。一方、西側のチャラクサ氷河は入山可能だったので、2004年にスティーブ・ハウスやスロヴェニアのマルコ・プレゼリを招き６人で遠征。カプラ・ピーク（6554 m）に初登頂したほか、ハウスがＫ７の新ルートをソロし、ナンガ・パルバット南壁を試登、スウェンソンはマゼノ山稜を縦走し、初めてマゼノ・ギャップに到達したものの、頂上は7300 mで断念した。

この間、チャラクサ側からリンク・サールに挑んだのは英国のジョナサン・グリフィスで、2012年の試登に始まって４年連続、さまざまなパートナーと北西壁からリンク・サールを狙った。2014年にはケヴィン・マホニー（米）と壁を登り切ったが、飛び出した稜線は、続行不可能なほど悪いリッジだった。彼は翌年、２年前に行を共にしたアンディ・ハウスマンと北西壁を完登、頂稜を進んで西峰（6938 m）に立ったが、主峰までまだ１ｋｍの距離を残した。

スウェンソンは、出番が回ってくる前の2015年に近くのチャンギ・タワー（6500 m）に登ってリンク・サール南東壁を観察し、ルートへの確信を深めた。

ようやく許可を得たスウェンソンはすでに65歳。同じくＡＡＣ会長経験者のマーク・リチー（61）を誘い、グレアム・ジマーマン（33）とクリス・ライト（36）を加えた４人で６月10日、カベリ氷河の3600 m地点にＢＣを置き、1100 mに及ぶ下部岩壁の取付きにＡＢＣを出した。冬季の大雪で雪崩の危険が高い雪の状態が落ち着くまで待ってから７月31日に攻撃を開始、79年立正大隊のやや右手から取付いて、８月４日に6700 mまで達した。翌日、頂上直下までライトがリード、最後は、ペルーアンデスなどで不安定な雪壁の経験を積んできたリチーのリードで締めくくった。

リンク・サール南東壁　アメリカ隊の登攀ルートとビバーク地を示す　www.mountaineers.org/blog/

新連載 ～創立60周年に向けて～ ⑯

『日山協と私』

常務理事・事務局長　小野寺　斉

― 指導委員会時代 ―

本稿においては、既に日本体育協会（日体協）は日本スポーツ協会に、日本山岳協会（日山協）は日本山岳・スポーツクライミング協会に各々名称変更しているが、当時の名称をそのまま使用する。

「おい、小野寺、お前日山協の指導委員になれ」、突然に電話があり訳も分からずハイ、と言ってしまった。これが一本釣りというものと分かったのはだいぶ後になってからである。１種指導員検定を受検後、公式合格発表前に指導委員会の故本多昭一さんからであった。

日山協の指導員制度は日山協設立後の1960年代に始まる。1961、62年に規程も作成された。１種指導員、２種指導員である。共に日山協公認指導員となるわけであるが、１種は２種合格後３年以上経ってから論文形式で日山協が直接検定を行う。２種は現場に即して主に実技検定が中心であり、登山知識検定がそれに加わる。都道府県の山岳連盟（協会）に委嘱して検定する。その後地区（地域）指導員も追加されたようだ。これは１種や２種とは別のカテゴリーでその地方特有の山に関する指導を行うものである、と聞いたことがあるが、詳細はわからない。ただ、２種受検の１段階前の資格に徐々になっていったようである。

私自身は1981年から82年にかけて都岳連で２種指導員合格になり都岳連では指導委員会委員になった。その後に１種受検し合格したものである。ただ日山協においては最初の１、２年は主だった活動はしていない。当時の指導委員会には錚々たる方々がおり、年齢的にも経験的にもレベルが違って見えた。都岳連指導委員会とは違った雰囲気であり、さらに当初はそれほど日山協指導委員会で行っている内容にも興味をもてなかったのも事実であった。徐々にではあるが研修会、地方に出かけての登攀研修会や富士山の雪上研修会にも出席するようになり、技術的な事にも興味を覚えてきた。

研修会・講習会の後では、一番若いという事で月報用の報告書は常に書いていた。指導委員会は技術的な事に対しては真摯に取り組んでおり、私自身仕事も技術畑であったせいか、その理論などには興味を持って勉強したものである。当然そのことを研修会で受講生に伝えることもあり、真剣に取り組んだものである。身をもって教えて頂いた先輩には、ソフトな感じの増子春雄さん、今は亡き松永敏郎さん、最初はハードな印象を受けたが、私が委員長になって暫くしてからはソフトになっていった。独特な雰囲気で山の職人ともいえる堀江栄次さん、明るくまじめな大曾根弘さん、語り口に特徴がある盛晋さんなどがいた。私より後に入ってきた萬場健さんは神奈川の血を全うに受け継いでいる人であった。増子さん推薦で（当時の文部省）登山研修所講師になることもできた。萬場さんは後に指導員の規程集を作るときには積極的に動いてくれた人である。

この時代は技術的には、制動確保においてはボディか器具かで意見が別れ、今はほとんど器具と思われるが制動感覚を身に着けるボディのよさも必要とのことで日山協や登山研修所では長い間ボディ中心の技術であったかと思う。それは器具を否定するのではなく、器具においても制動技術は必要であり、器具に便り過ぎるあまり制動をしないケースが見られ、体で制動とはどのようなものか身をもって知ることが必要だとの考えからだったと思う。以上は隔時登攀の時の場合であるが、同時登攀においては、大阪方式ともＯＳＭ（Ｏｓａｋａ Ｓｈｏｕｌｄｅｒ Ｍｅｔｈｏｄ）ともいわれる技術を編み出した松本憲親さんにも触れておきたい。松本さんとは日山協研修会でご一緒したことはない。ただ、当時は日山協の研修会で大阪方式の研修も行っており、批評などを登山月報に書いたりするとその後に登山研修所の同じ研修会でご一緒するとあの文についての意味は何か、などよく言われたものである。研究熱心でいつもいろいろと試していて印象に残る人であった。

1992年だったと思う。私の海外遠征（ダウラギリⅠ峰）の翌年である。鳥取の松尾健司さんからお話があった。日山協でも各岳連でも教えている技術はほぼ同じ、

積雪期講習会（富士山佐藤小屋）

しかし岳連内の指導員が教えても興味を持ってくれない。そこで中央からという事で技術の講習に来てほしい、日山協を通すのではなく小野寺個人に直接依頼するので是非協力してほしいとのことであった。一も二もなくお引き受けした。毎年２月頃であったかと思うが数年間続いた。鳥取には大山がある。地勢学的には海に近く天候が不安定な場所ではあるが、研修の場としては降雪もありもってこいの場所である。お陰様で冬の北壁も登らせて頂いた。この講習を聞きつけた方があり、もっと発展拡充させようという事で西日本を対象にした遭対研修に移行していった。これには一時曲折があったが、それでもこれも数年間続いたと思う。形を変えてこの大山の講習は続いており、大事にしていきたいものである。

指導委員会と言えば登山技術もさることながら指導員制度とは切っても切り離せない縁がある。前述の様に日山協のみの制度は1960年代に始まった。それは時代背景として悲惨な遭難が相次ぎ、それらを防ぐためにしっかりした技術を登山者に習得してもらうということでの事だった。同時期に（当時の文部省）登山研修所も開設されている。

次代は下って1970年代後半であろうか体協でも指導者制度が開始された。これはその後10年を経て文部科学大臣認定（その後、社会体育指導者制度）に連なるもので、体協の加盟団体に呼び掛けて加盟団体共通の共通科目と加盟団体ごとの専門科目に分かれている。1988年～89年ころには全ての体協加盟団体の指導員制度がＡ，Ｂ，Ｃ級の教師、競技力向上コーチ、そして地域スポーツ指導員に移行となるのであるが、この時期は日山協はまだコーチ、上級コーチの中で上級コーチのみを採用し、当然共通科目は必須、専門科目として別途研修会を設けていた。私は1986年に上級コーチになっている。その時点では１種、２種も同居したままであった。体協指導者の方は１種の方が数多く受検していた。新規の２種の受講者は目減りしていた。都岳連の２種検定は私が担当していたが、毎年減少の一途を辿り、かつてのレベルを維持できなくなっていたのも事実である。この1980年代後半の体協の資格については、その数年前から各加盟団体とその資格の移行について細かい打ち合わせがもたれていたようである。私はそれには直接的には関わっていない。

都岳連でも移行前の最後の２種検定と称して募集したら40人以上集まり、これにはびっくりしたものである。遭対委員の川原崇さんや西原正さんなども積極的に後押ししてくれたことを覚えている。日山協で最後の１種検定を行い不合格だった方には補修を行ったことを覚えている。

結果として地区指導員は地域スポーツ指導者Ｃ級指導員、２種はＢ級、１種はＡ級となり、上級コーチのうち、18人が競技力向上指導者Ａ級コーチ、その他がＢ級コーチとなった。私は運よくＡ級コーチとなった。特に地域スポーツ指導者はそれぞれ共通科目を受けなくてはいけない。日山協はアンケートをとって移行希望者を募り、希望しない人は数年で指導員資格が無くなるとの通知を出した。移行の場合共通科目は移行講習として時間的にも優遇されるが、とにかく共通科目を受ける事自体、決められた時間数の講習会に出席できない人もいることになってしまったことも事実である。履修時間数の多さに敬遠した方も多かった。内容的には共通科目には運動生理学、心理学などの科目があり、今でこそこの分野は登山にも必要と考えられているが当時は山ヤにそんなものは必要ないとの声も多く聞かれたものである。本来の遭難防止の意義と社会体育、そして履修時間、このあたりが分かれ目となり指導者資格取得者は大分減った。この時期の日山協会長は斎藤一男さんだったと思う。何かの時に登山は技術ばかりではないよ、と暗に言ってくれた言葉は今でも覚えている。

ここで、競技力向上指導者について少しだけふれておきたい。講習時間数が格段に多く、当時競技としてスポーツクライミング（ＳＣ）は今ほど盛んではなく、山岳分野で必要か、との議論もあった。将来的な事を考えてこの制度を採用したわけであるが、Ａ級コーチの共通カリキュラムを見て山岳感覚で考えて国際的なディベートなどの科目があり、なるほどと感心したものである。ところが昨今はそれどころではなく、日体協のカリキュラムだけでは足りないようでＪＯＣ（日本オリンピック委員会）の講習会、さらにＪＳＣ（日本スポーツ振興センター）の戦略プラン等、世界のトップクラスを目指す指導者への要求レベルは遥かに高くなっ

登攀研修会（神奈川山岳スポーツセンター）

ている。それら共通科目に付け加えて専門科目のレベルも、例えば修士課程レベルに匹敵する内容等時代に即した医科学的な視点を多く取り入れていかなくてはいけないと思う。本稿の主題にそぐわないので詳細は省くが指導委員会が普及とトップの指導者の養成を並行して行うのか、今後議論する価値は十分にあると思われる。

1990年代の半ばに指導委員長をという話もあったが、エベレスト遠征への準備もあり、その間は他の方が担ってくれた。実際に常務理事・委員長に成ったのは1998年度からであり、2005年度まで８年間続いた。当時の都岳連会長の山本久子さんの強い推薦があったことも確かである。私は都岳連傘下の昭和山岳会に属しているが同会の小松崎栄太郎さん、酒井國光さんに続いて３人目の委員長に成った。就任当時の年齢は48歳になる歳であり、委員会内で最年少だったかも知れない。年間行事として前述の研修会があるのだが、全国にも同年代の仲間がおり多くの人に協力してもらった。徳島の原秀樹さん　高知の清岡謙一さん、徳島の十河利雄さんなどには毎回参加いただいた。清岡さんには高知に呼んでいただき技術研修を行ったが、プライベートな登山でも彼やその仲間と偶然一緒になったりしたものである。やや年上ではあるが、岩手の藤原利男さんにも研修会に呼んでいただいたりしたものである。また、大先輩として今は亡き北海道の鎌田耕治さんにも委員時代を通して大変お世話になった。北大でも机上講習会で講師にさせて頂いたことがある。

さて、指導要綱の作成である。この作成には多くの時間を費やした。ピーク時にはほぼ毎週皆で集まって議論しながら作成した。当初の考えからは多少異なったにせよ、ある方針に基づいての構成にしている。出来上がってしまえば当然ではあるが、多くの批評を頂いた。一人でではなく皆が関与しての作成である。今後は簡単には出てこないと思っている。委員会としても20年以上経ってからの久々の教程書であり、内容的にも当時としては価値のあるものであったと今でも思っている。

主任検定員制度発足の経緯についても触れておきたい。ＡＢＣ級の頃の話である。本来Ａ級指導員が一番上なのでそれ以下のクラスについてはＡ級が検定すればよい事である。ところが年齢を重ねるとどうしても体が動かない人が出てくる。やむを得ずということであったが、Ｂ級指導員の中からも検定できる指導員を選任しようという事になった。従って専門科目に関してはＡ，Ｂ級指導員資格取得者の中から改めて検定試

全国指導委員長会議(武蔵野市スウィングビル)

験を開催、主任検定員として４年ごとの研修を条件としての制度になった。資格を多く作ることは個人的には賛成ではないが組織的にはやむない事であった。

人に対して技術指導することは大変に難しいと思う。人間的な事はさておき、自分自身も講習会研修会とは別に登山活動を行っていなくてはならないと思う。指導委員であった1980年代から2000年代半ばまでは幸いにも所属の山岳会でも十分活動できていた。個々はともかく総じて精神・体力ともにバランスが取れ、国内では夏冬問わず北アルプス北部南部を中心に足跡を残す事が出来、研修会等の糧の一つにもなった。雑誌掲載や著作物もこの時代のものが多い。

「一の裏は六」の繰り返しではあったが、任期を全うしえたのはやはり支えてくれた方々のおかげである。私は前述の様に都岳連出身であるが、日山協との関りでは都岳連は勿論のこと全国の多くの方々にご交流頂いた。ありがたいことである。

誰かの言葉に「人は良いことをしながら悪いことをし、悪いことをしながら良いことをしている」というのがある。多分誰にでも当てはまる気がする。思想も信条も様々な人が近づいたり離れたりしている。皆同じなのだと思うが、一つの委員会と言いながらも社会の縮図、密度の濃い縮図を経験させていただいたし、関わって頂いた方々の今後の発展を期待するものである。

パタゴニアを代表する名峰、フィッツロイとセロ・トーレを望むトレッキングへ

パタゴニア・フィッツロイ山群 トレッキング 11日間

発着地	出発日	旅行代金
東京	11/26(火)・1/16(木)	620,000円

※燃油サーチャージ(2019年8月20日現在：目安約21,000円)が別途必要です。

旅行企画・実施　観光庁長官登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員／ボンド保証会員

アルパイン ツアー サービス 株式会社

本社 〒105-0004 東京都港区新橋3-2-5(第5東洋海事ビル4階)☎03-3503-1911
大阪☎06-6444-3033　名古屋☎052-581-3211　福岡☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com　http://www.alpine-tour.com

International Summer Climbers Meet 2019報告

イギリスの山岳協会であるＢＭＣ（British Mountaineering Council）が 主催するInternational Summer Climbing Meet。年に １度、開催時期を夏・冬と人替えながら開催される本ミーティングでは、世界各国から有志のクライマー達が集い、イギリス本場でトラッドクライミングを学び、実践し、そして交流しあう。今年はイギリス・ウェールズ地方での開催となり、18ケ国22名のクライマー達が集った。

〈スケジュール・行動概要〉

5月12日：到着日／マンチェスター空港から送迎 。2時間ほどかけて開催地のウェールズへ。
5月13日：クライミング。南アフリカのクライマーによるプレゼンテーション。
5月14日：クライミング。クロアチアのクライマーによるプレゼンテーション。
5月15日：クライミング
5月16日：クライミング。カザフスタンのクライマーによるプレゼンテーション。
5月17日：クライミング。Emma Twyfor dによるプレゼンテーション。
5月18日：クライミング。セレブレーションパーティー。
5月19日：帰国日／マンチェ スター空港まで送迎。

到着日と帰国日以外は、連日、終日 クライミングというスケジュール。イギリスは基本的には気候が不安定だが、私たちが訪れた１週間に関しては 連日晴れ渡り、一日も余すことなくクライミングに出かけることができた。一人のゲストに対して一人の現地ホストクライマーがついて各エリア・ルートをアテンドするという形式である。２日に一度アテンドするホスト クライマーが入れ替わるので、各ゲストクライマーは期間を通して３名のホストクライマーとクライミングを共にすることになった。

実際に滞在したのは、ＨＵＴ'(Ynys Ettws,llanberis

Pass, Near Nant Peris, Caerna「rfon,Gwynedd,LL55 4UL,UK）という施設で、ドミトリー形式の山小屋だった。キッチンやホットシャワーも併設され、長期間快適に過ごすことができる。

毎日７時頃に起床した後、ビュッフェ形式の朝食を摂り、用意されたランチを持ち、パートナーと車に乗って出掛ける。エリアやルートはゲスト本人の実力や希望が最大限尊重される形で決定するので、向かう先がリリスキーなトラッドばかりに傾くわけではない。夜はＨＵＴに戻ったあと、Cabanと呼ばれるレストランで夕食を摂り、各国のクライマーによるプレゼンテーションを 聞き、１日が終了する。

〈クライミング〉

Dinas CromlechやSlate、Gogarthなど、あらゆるエリアに訪れた。内陸のショートルートから、海沿いのマルチピッチまで多種多様な岩場でトラッドクライミングをする中で、イギリス特有のグレーディングシステムである”Ｅグレー ド"をおおよそ正しく理解することができたと感じる。ここで詳しくは述べないが、ルート全体の肉体的困難度とリスクが正しく予想できる合理性がＥグレードにはある。日本においても（日本だけでなく世界の多くの場所で）、そのグレーディングシステムは採用されるべきだし、そうすることでトラッドクライミン

グが正確に評価され、多くのクライマーが無駄に躊躇することなくトライできる機会が増えるだろう。

〈所感・総括〉

最初の１～２日目は、イギリス独特のプロテクションの取り方やランナウトに少々困惑した。 例えば、ノプやフレークのような形状のホールドにスリングをかけてプロテクションとしたり、小さなポケットにマイクロナッツをねじ込んでプロテクションとしたりする。それでいて、何メートルもランナウトしたりする。時には、地上からかなり離れたファーストプロテクションがそれだったりもする。ヴァリエーションはそう多くはないものの、いずれにしても「クラックにカミングデバイスをセットする」という、日本でよく目 にする光景ではなかった。

リードは甚本的にダブルロープ方式である。プロテクションによってルートが導かれることが多いので、往々にしてラインどりは蛇行する。また、ロワーダウンではなく、リードの後は必ずパートナーはフォローしてクライミングを終える。

現地のクライマーは、カミングデバイスよりもナッツ（ワイヤー）を多用する。ナッツは、１ギアあたりの重量が軽く、たくさん持っていくことができるというメリットがある。他にも、特にヘキセントリッ クなどは複雑な形状の クラックやポケットにセットすることが可能あり、実はカミングデバイスよりも融通が利く。 グラウンドアップ、オールナチュラルプロテクションでルートをトライしていくことに肯定的なイギリスでは、結局のところナッツが最も潰しのきく道具だということになる。「何故ボルトを使わないのですか？」という質問に対しては、どのクライマーもきっぱりと「倫理観」と答えてくれた。もう少し具体的に、「イギリスは山が小さいから、工夫して登ることで冒険性を追求している。」、と答えたクライマーもいた。いずれにしても初心者でも、もちろんベテランでも、各々の実力をよく客観視したうえで、自分なりのトラッドクライミングを実践している。もちろん、イギリス国内のすべてのルートがノンボルトという訳ではない。石灰岩のエリアや、今回私が訪れたslateの岩場などではボルトが使用され、難しいムーヴの練習には最適だ。

多くのクライマーは、ナチュラルプロテクション（時にはエイドギアも）の特性をよく理解しながら、自分の力量が潜在的リスクの範疇を超えないように見定めながらトラッドクライミングを実践している。時にはスポートクライミングで難しいムーヴの練習をしながら、個々に研鑽を重ねているようだ。

（記　門野巧昴）

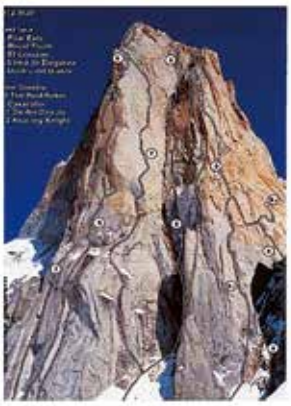
令和元年度前期 海外登山奨励金 選考結果

日本山岳・スポーツクライミング協会では、海外登山の振興と技術の普及、向上を目的として、海外登山奨励金制度を制定し、斬新、独創的で、多大な成果の期待できる登山計画に対し、奨励金を交付しています。

今期（令和元年９月～令和２年２月出発予定の隊）は４隊の応募があり、厳正な審査の結果、下記の３隊に奨励金を交付することを決定いたしました。

■ＨＣＣ隊

期　間：2019年10月８日～ 2020年２月28日
隊　員：増本亮、増本さやか
山　域：ヨセミテ・エルキャピタン～パタゴニア・フィッツ・ロイ
内　容：ヨセミテではエルキャピタン南東壁「Freerider」の日本人女性初と「Salathe Wall」の日本人二人目を狙う。パタゴニアではフィッツ・ロイ東壁「Linea deEleganza」、アグハ・デ・スモチャーダ、アグハ・デ・ラシージャ、フィッツ・ロイの三座をフリークライミングで継続登攀する「The Wave Effect」を狙う。
評　価：エルキャピタンでの肉体的チャレンジからフィッツ・ロイでの冒険的チャレンジとなるビッグウォールのフリークライミングを評価。
交付額：30万円



■チームＢ＆Ｓ

期　間：2019年11月１日～ 12月13日
隊　員：横山勝丘、加藤直之、倉上慶大
山　域：アメリカ・ユタ州、モアブ近郊ミネラルキャニオン
内　容：アメリカでも未開拓な上記エリアの岩壁群でフリークライミングのルート開拓。
評　価：本場アメリカでも手が付けられていない未開拓の岩壁群に日本人がルート開拓に挑む意気込みを評価。

交付額：20万円

■単独フリー登攀

期　間：2019年10月中旬～ 2019年11月中旬

隊　員：倉上慶大

山　域：アメリカ･カリフォルニア州、ヨセミテ、エルキャピタン、ハーフドーム

内　容：ハーフドームやエルキャピタンなどのビッグウォールをグランドアップで単独フリー登攀（ロープソロ）のスタイルでワンプッシュ完登を目指す。

評　価：ルートのワークも含め、クライミングに纏わるすべての工程をグランドアップ、かつ単独で行うという人間の個としての限界に挑戦することを評価。

交付金：10万円

山の日・YAMANASHI
第4回「山の日」記念全国大会2019

８月11日に第４ 回「山の日」記念全国大会2019（同大会実行委員会主催）の記念式典とトークセッションが、原田義昭環境大臣、本郷浩二林野庁長官をはじめ長崎幸太郎山梨県知事、樋口雄一甲府市長など県内外の行政・山岳関係者らが出席し、開府500年の節目を迎えた甲府市で開催された。

前日には甲府市のホテルでレセプションが盛大に行われ、地元の食品が振舞われた。オープニングでは金川の森ブラスクインテットによるウェルカム演奏。長崎知事や衛藤征士郎超党派「山の日」議員連盟会長から主催者挨拶の後、地元の赤池誠章参議院議員が祝辞を述べ、樋口甲府市長のご発声で乾杯となった。

歓談中には山梨県ＰＲ動画、こうふ開府500年プロモーション動画、甲武信ユネスコパークの上映・紹介があった。アトラクションでは金川の森ブラスクインテットによるミニコンサートが行われ、会場は盛り上がった。

翌11日は、甲府市総合市民会館「山の都アリーナ」で記念式典が行われ、全国から約900人が来場した。開会前には山梨トロンボーン倶楽部のウェルカム演奏とオープニング映像で山梨県及び甲府市の紹介があった。

地元の「こどもの森みどりの少年少女隊」による「山鐘（８鐘）」で式典が開始。今大会の顧問でもある衛藤会長が開会を宣言した後、実行委員会会長の長崎知事は、山梨県内の山々の魅力と豊かな大地からもたらされる恵みについて語られた。続いて地元の樋口市長が歓迎の挨拶をし、来賓を代表して原田環境大臣、本郷林野庁長官が挨拶した。

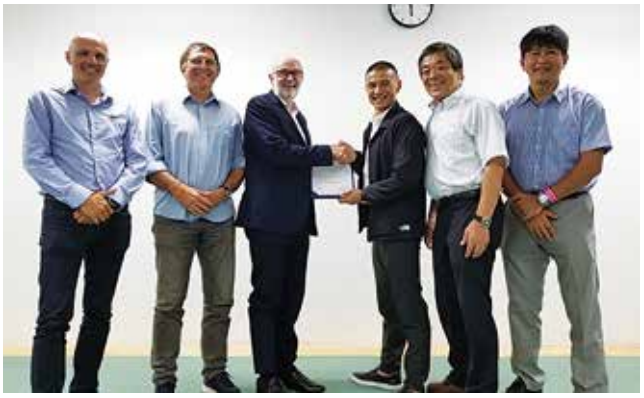
メインアトラクションでは、第１景「富士山火焔太鼓」の和太鼓演奏の中、「山梨の山々」の映像上映があった。続いて第２景では、山梨県や姉妹都市からのメッセージが紹介され、こどもの森緑の少年少女隊への苗木の贈呈があり、式典後、会場の敷地に植樹された。

第３景では、祝日「山の日」のために作詞作曲された「山はふるさと」の歌を神部冬馬さんとこどもの森みどりの少年少女隊が合掌した。

来年の第５回「山の日」記念全国大会の開催地となる大分県からは、安東隆副知事、日野康志九重町長がお見えになり、リレーセレモニーでは「山の日の帽子」の引き継ぎが行われた。　（記　尾形好雄）

挨拶する衛藤大会顧問

JMSCA／FFMEの覚書締結



日仏のNF／クライマーの交流の歴史は既に長期に及ぶ中、この度JMSCAとFFME(Federation Francaise de la Montagne et de l Escalade)はスポーツクライミングの更なる発展のために相互協力を行うことを目的に、去る8月15日(木)に覚書に調印した。

相互協力の内容は、以下の通り。

- スポーツクライミングのみならずスポーツ全体の発展を目指す。
- ＮＦ役員、ジャッジ及びセッター、コーチや選手の意見交換の場を設定。
- 代表チームの合同合宿
- 両ＮＦ主催大会への相互参加（ジャッジ及びセッター、選手）

この覚書締結に対してＩＦＳＣからは、「ＩＦＳＣとしてもこのような覚書締結は喜ばしい。両ＮＦの活動が両国選手の活躍以上の成果をもたらすことを期待している。これまでの交流の歴史もさることながら、東京2020オリンピックの経験をパリ大会に繋ぐという重要な架け橋の一助にもなり、オリンピックの成功に寄与することと期待する。」とのコメントが寄せられた。

2019年度「上月スポーツ選手支援事業」認定式

９月４日（水）、ザ・リッツ・カールトン東京に於いて、2019年度「第18回上月スポーツ支援事業」認定式と「上月スポーツ賞」表彰式が開催された。

18回目を迎えたこのスポーツ支援事業は、日本を代表し、将来が期待されるスポーツ選手・指導者に対して競技能力の向上を図り、スポーツ活動に打ち込める環境を整えるための支援事業で、認定選手には年額60万円の助成金が１年間交付される。今年度は、スポーツクライミングなど14競技から、優れた素質を持つ78名が支援対象者として認定された。

スポーツクライミングの認定者は、川又玲瑛（栃木県立宇都宮南高等学校１年）、谷井菜月（橿原学院高等学校１年）、西田秀聖（天理高等学校２年）の３名。

ネパール航空が就航

ネパールの国営航空、ネパール航空が、関西空港～カトマンズ路線を2019年８月29日から開設した。

日本からカトマンズへの路線は、2007年以来の再開で、週３便就航する。

2020年は「ネパール観光年」。この就航を観光客200万人を目指す追い風にしたいとのこと。

ネパール政府観光局は、この就航を記念して９月２日に都内ホテルで「Nepal Destination Promotion Program」に合わせて記念セミナー及びカクテルディナーパーティを開催した。

挨拶するプラチバ・ラナ駐日ネパール大使

安全登山サテライトセミナー（福岡）

このセミナーでは、安全な登山を基礎から学ぶことができます。「登山経験は少ないが高校山岳部の顧問になられた方」「独学で登山をされている方」「トレランをしているが登山についてよく知らない方」など、登山初級者の方にも参加していただける内容です。参加費は無料です。

期　日　11月16日（土）～17日（日）
会　場　九州大学伊都キャンパス
　　（椎木講堂・第２講義室）
内　容　・事例から学ぶ山の医学～怪我への対応と低体温症（大城和恵）・安全登山の仕組みとプラニング（北村憲彦）・登山中にトラブルを起こさないための身体知識とトレーニング方法（山本正嘉）・登山における積雪と雪崩の基礎知識（飯田肇）・気象遭難を防ぐための天気図の見方（猪熊隆之）・山は素敵な○○出会いの場（村越真）
申込み　https://www.jpnspot.go.jp/tozanken/syusai/tabid/171/Default.aspx）

JMSCA

令和元年度
第４回理事会報告

日　時 令和元年８月１日㈭ 14時～18時
場　所 Japan Sport Olympic Square
３階10号会議室
出席者　八木原会長、亀山、平山、丸各副会長、尾形専務理事、小野寺、水島、合田各常務理事、相良、蛭田、村岡、村上、水村、山口、六角、唐木、安藤、古賀、山本、古林各理事、中畠、古屋各監事
欠席者　小日向・前田・町田各理事
監事を除き上記23名中20名出席。以上、会議は成立。（定足数12名）
定款第32条に則り会長が議長を務め、議事録署名人を定款第34条に則て会長・監事にお願いして議事に入った。
（議事に入る前に合田常務理事から世界選手権派遣選手について状況報告があった。）

１．議　題
- 議案第１号　第３回理事会議事録の承認について（事前送付済）
異議なく承認された。
- 議案第２号　第１次補正予算について
資料に基づいてＩＦＳＣ世界選手権2019八王子の補正予算について提案があった。
助成金交付内示額の減額とチケット販売の修正による収入減。安全上からの指摘による大会施設費や演出費の増大による支出増が説明された。
また、ボルダリングユース、コンバインド大会の途中収支は既に赤字になっていることも報告された。
結局、議場では議論が尽きず、以下の考えについて採決を行った。
「各岳連に対する説明や役員責任の事を考えると、プロセスは重要であり、再度支出減と収入増に努力し、臨時理事会を開いて正式決定すべきである。」
賛成は14名、反対４名で可決された。（20名出席中、会長公用にて途中退出及び議長を除き計18名）
８月９日㈮ 13時～臨時理事会を開催することになった。
- 議案第３号　国体競技に関する規定について（再提出）
資料に基づき提案があった。一部文言訂正の上、出席者全員により異議なく承認された。
- 議案第４号　ＦＦＭＥ覚書締結について
資料に基づいて提案があった。出席者全員により異議なく承認された。
- 議案第５号　後援、協賛等の依頼承認について
⑴植村直己顕彰事業「2019日本冒険フォーラム」に係る後援名義使用承認について
⑵第13回生駒山チャレンジ登山大阪の後援依頼
⑶第27回日本山岳耐久レース後援承認
上記３件については、異議なく承認された。尚、これらの審議は常務理事会マターとし、初回は審議するが、２度目以降は報告事項にする。

２．報　告
- 報告１号　ＪＭＳＣＡと地方岳連の状況について―東海ブロックからの要望
資料に基づいて東海ブロックからの要望が報告された。
ブロック大会については複数の理事から経験談が披露された。ブロック大会は、原則当該県体協の予算で行っているが、地域により格差があることが認識された。ブロック大会と強化合宿の日程が重なることについては、オリンピック前だから、という認識がなされたが、ＳＣについてはＪＭＳＣＡと各岳連（協会）の関係について整理する必要があるとの意見があった。
- 報告２号　世界選手権及び世界ユース選手権への派遣選手について
資料に基づき、報告があった。
- 報告３号　世界選手権ウォール活用についての回答（青森）について
青森から引き受けたい旨の回答が報告された。

２．専門委員会報告
２－１　ＳＣ医科学委員会
７月５日㈮　出席９名
ア）競技会医務担当割り当て
①ＩＦＳＣ世界選手権
（８月11日～21日　八王子、東京）
②ＪＯＣジュニアオリンピック大会
（９月14日～16日）
③リードＷＣ印西大会（10月26日、27日）
④ジャパンツアー
イ）各業務担当委員報告
①救護担当（中島委員）
コンバインドジャパンカップ（西条）
スピードで擦過傷　ボルダリングで手首捻挫、アイシング処置。立地の関係で、熱中症の危険があった。
②学術担当（代、六角委員長）
場所：東京（詳細未定）、期日：11月頃
内容（予定）：スポーツ障害について（六角委員）、皮膚ケアについて（大森委員）、救急関連（山本専門委員）、コンディショニング関連（トレーナー）を予定。
③強化関連
ＢＭＩ関連報告（六角委員長）
計測の拒否例あり。・拒否に対する対応については、理事会にて検討予定。
ウ）2020年オリンピック関連
①ＴＶ会議（中島委員、樋口委員）
樋口委員が理学療法サービスコーディネーターから大会開催中は、Venue Chief Physical therapist（VCP), Athlete Care Coordinato r（ACC）の兼任となる。
エ）そのほか
今後テレビ会議を導入予定。運営ルールを決めていく（樋口委員）。

２－２　共済委員会
７月24日㈬　出席者６名
ア）令和元年度加入状況について
６月までの加入者：48,713人（前年比１,338人減）７月15日現在では、50,165人
イ）加入促進対策について
- チラシ配布（３万枚）
- 毎日旅行社『世界の山・日本の山』への広告出稿と栞混載（15,900部）
- 各岳連へ共済会委員の選任依頼について

ウ）令和２年度山岳共済会栞内容について
エ）山岳共済会新規事業について
- 減遭難啓発事業―音声入りアニメ動画制作（サン・アド）の進捗状況報告

オ）保険料改定に伴う商品ラインナップについて
- 2019年10月１日から「団体総合生活補償保険」の補償内容と保険料率が改定「標準型」から「ＭＳ＆ＡＤ型」への切替（職種級別がなくなる）や死亡保険金の調整などで、保険料を約10％程度の値上げに抑える商品ライナップ案を承認。
- 国内旅行傷害保険の業務効率化に伴う契約・特約規程の改定について

３．会務・役員派遣等
（７月13日～７月31日）
⑴安全登山サテライトセミナー
７月13日㈯～14日㈰　於：大津市民会館　古賀・前田理事
⑵文部科学大臣表彰式
７月23日㈫　於：ホテルニューオタニ「鶴　西の間」　八木原会長
⑶ＪＯＣ本部会
７月23日㈫16時～　於：ＪＯＣ会議室14階　合田常務理事
⑷第４回ＷＣＨ2019実行委員会
７月23日㈫　於：エスフォルタアリーナ八王子　尾形専務理事、村岡理事
⑸東京2020オリンピック・パラリンピック１年前セレモニー
７月24日㈬　於：東京国際フォーラム・

寄贈図書

雑誌	（株）ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.867
	（株）山と渓谷社	「山と渓谷」No.1013
	宝島社	「東京五輪を観たい」
	Club alpino italiano	「Montagne360」agosto2019
	㈱シマノ	「Fishing Café」autumn 2019 Vol.63
会報	明治大学山岳部炉辺会	炉辺通信 No.190
	FEEC	「VERTEX」285
	兵庫県山岳連盟	兵庫山岳 第626号
	日本運動具新報社	スポーツ産業新報 第2261号、第2262号、第2263号
	日本武術太極拳連盟	武術太極拳 No.359
	埼玉県山岳・スポーツクライミング協会	埼玉岳連 65号
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.535
	東京野歩路会	「山嶺」No.1074 ９月号
	愛知県山岳連盟	愛知岳連ニュース第434号
	やまびこ山想会	やまびこ第184号
	日本山岳写真協会	日本山岳写真協会ニュース８月第465号
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.717
冊子	ダイオープリンティング	「ACTIS」８月号

ホールＡ　丸副会長、尾形専務理事
⑹高頭祭
７月25日㈭　於：新潟・弥彦神社
八木原会長
⑺福岡岳連　法人化説明会
７月26日㈮　於：ＪＭＳＣＡ会議室
小野寺常務理事、山口理事、山根担当委員（福岡）
⑻スポーツ国際展開基盤形成事業第１回情報共有連絡会議
７月31日㈬　於：ＪＯＣ事務局13階
小野寺常務理事、小日向理事
⑼追加競技ＮＦミーティング
７月31日㈬　於：ＪＯＣ会議室
小日向、古林理事
⑽世界選手権スタッフ説明会
７月31日㈬　於：フォーラムエイト
村岡理事

表紙のことば

「眠れる獅子」と呼ばれる、ジャヌー（7,710ｍ）は、その独特の山容から怪峰として古くから知られてきた。

ジャヌーは、フランス人の執念の山だ。1957年の偵察隊（Ｇ．マニョーヌ隊長）、59年の１次隊（Ｊ．フランコ隊長）に次いで62年、Ｌ．テレイの率いる第２次隊がヤマタリ氷河から隊員９名が初登頂した。

1983年、ネパール政府は、ネパール・ヒマラヤの山名を改定した際、ジャヌーはクンバカルナと命名された。左のピークはカンバチェン（7,903m）。

（記　尾形好雄）

編集後記

ＩＦＳＣクライミング世界選手権八王子大会を観戦に行った。コンバインド男子決勝戦、結果は楢崎選手優勝、女子は前日野口選手が準優勝、ともにオリンピック日本代表に内定し安堵した。観客には音響、照明、ＣＧ映像などによる、ショーアップ効果があったように思うが、試合時間帯を含め選手はどんな思いで戦っていたのであろうか。選手第一ならば功罪に一考の余地ありと考える。

（広報担当　水島彰治）

登山月報　第 606 号
定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　令和元年９月15日
発行者　東京都新宿区霞ヶ丘町４番２号
Japan Sport Olympic Square 807
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03－5843－1631
ＦＡＸ　03－5843－1635

一般財団法人 日本トレイルランニング協会
〒141-0031
品川区西五反田６-３-23-205
☎03-3492-0355　FAX 03-6451-3767

NPO法人 北丹沢山岳センター
神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会
事務局　〒252-0184　神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
TEL 042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
◦ 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
◦ 陣馬山トレイルレース実行委員会
◦ 道志村トレイルレース実行委員会
◦ 八重山トレイルレース実行委員会
◦ 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会
◦ 上野原秋山トレイルレース実行委員会
大会々長　杉本憲昭

山岳雑誌 岳人（がくじん）
山と人、時代をつなぐ「岳人」

10月号 発売中
【特集】ひとりの山 ～単独行を考える～
★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中！
毎月15日発売　価格815円(+税)

年間購読がおすすめです。
購読割引　送料無料　限定品プレゼント
年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。
通常本体価格12冊 ~~9,780円~~(+税) → 年間購読なら12冊 8,965円(+税)
1年間で815円 1冊分無料！
※次号（11月号・10月15日発売）より全頁カラーとなり価格が変更となります。

年間購読特典
岳人てぬぐい
登山中の汗拭きや下山後の入浴などで何かと重宝する手ぬぐいです。

全国1,800カ所以上でご優待！
岳人カード

「岳人の湯」や「モンベル フレンドショップ」など提携施設でカードをご提示いただくと、各種ご優待を受けられます！
モンベルクラブ・メンバーズポイントの加算やご利用はできません。

年間購読のお申し込みはこちらから！
https://www.gakujin.jp/
全国のモンベルストアでも受付中！
お問い合わせ　モンベルポスト
フリーコール 0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

あなたを守る。あしたを作る。

三井住友海上

損害保険と聞いて、なにを思い浮かべますか？

ケガ、災害、事故…日々の中で起こりうるリスクをカバーする。それは私たち三井住友海上の重要な任務ですが、すべてではありません。たとえば同じ自動車保険でも、暮らしの変化や自動車の進化を見つめて改善を続けること、宇宙開発や再生医療など、まだ世界にない保険を新しく作ることで社会の前進をサポートすることも、とても大切な役割です。変わらない一日に寄り添い、より豊かな明日を実現したい。だから私たちは、守ることと作ること、その両方を繰り返しながら前へ歩み続けます。

三井住友海上
時空保険
探査部
Space-time Insurance
Exploration Department

立ちどまらない保険。
MS&AD
三井住友海上

東商アソシエート株式会社　www.climbing-tosho.com　Tosho Associate

日山協 山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397
E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp
月曜日～金曜日 10:00～17:00 (祝日除く)

携帯からも資料請求ができます。
公益社団法人 日本山岳・スポーツクライミング協会
携帯サイト（www.jma-sangaku.or.jp）

WEBからもお申込みいただけます（ www.sangakukyousai.com ）